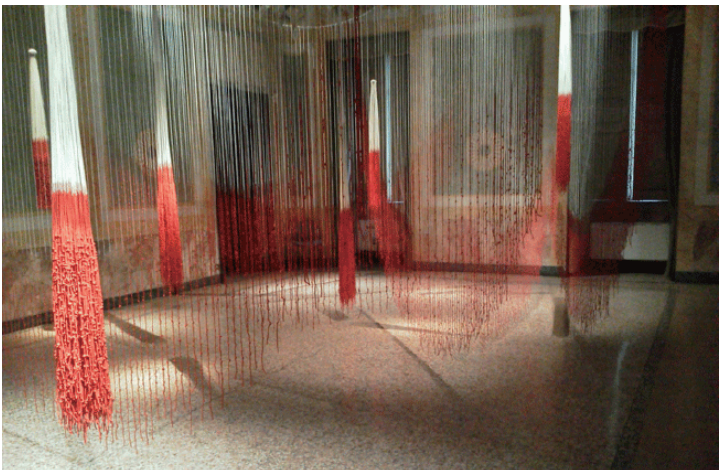


展示のお話をいただいてから新作を構想することになり、作品は展示のスペースを考え、今までになく大規模なものとなりました。多大な時間と労力のいる作品でしたが、このような大作を創る機会をいただき、ものづくりの心に火がつき、ワクワクする新しい経験の一つとなりました。

作品を展示する空間は、建物自体が芸術文化に力を注いだ貴族ヴィスコンティ家の元別荘である文化財で、フレスコ画と美しい吹きガラスでできたシャンデリアのある大きな1室を使うことになりました。文化財である建物に、様々な条件のアートの展示など、日本では考えられない事です。はじめはこのスペースに合わせ建物を傷つけない様にどのように展示の計画が出来るのか当惑したのですが、ほぼ私が指示した通りに展示のテクニシャンが、空間に吊るすとても繊細な私の作品を、物の見事に展示してくれました。そのプロフェッショナルな仕事ぶりにはとても感心させられました。ライティングも同様に、この様な職人技の集合がこの展覧会を支えているのです。



展覧会の企画は、イタリアのアーティストの家族が中心にARTE&ARTE協会として、キュレーターやこの地方のアートカウンシル協力のもと、イタリアやヨーロッパの企業からファンドを受け運営しています。日本におけるこのようなテキスタイルアート展の企画は、繊維企業の低迷とともにほとんど消え去っていききました。現在はイタリアも財政状況が厳しく資金集めに苦慮されておられますが、この規模の国際的な展覧会を毎年運営するには、並大抵の事ではなく、この企画に大変な情熱を傾け、芸術文化を支える心根が成し得た事だと深い感動を覚えました。

イタリアにはアートとアートを求める心が根づいていて、日常の暮らしの中に産業、芸術、文化、伝統がバランス良く溶け込み、成熟した文化の薫り高い国であることを再認識することになりました。

写真：奈良平 宣子

020. 心ひかれるものたち

「自然への尊敬の念を込めて、環境を汚さない、土に還る素材で、丁寧な手仕事をされた服や暮らしの道具など、自分にとって必要不可欠なものを作りたい。」ヨーガンレールの言葉である。神戸の元町、大丸近くにあったヨーガンレールの路面店をふらりとこのぞくが好きだった。今は大丸百貨店の中に入っている。その路面店は、ヨーガンレール+V(ヴーリ)が展示されていて、森林浴をしてマイナスイオンを浴びたと時と同じような心地よさがあった。バ(ヴーリ)は、ヨーガンレール社による、天然素材、天然染料のみを使用した服と丁寧な手仕事によって作られた家具、食器、雑貨を扱うブランドである。静かなたずまいと力強い生命力にあふれた自然が感じられ、また自然とともに自分がいることを感じさせてくれる。そんな素敵な空気が落ちあふれ、豊かな気分浸れた。

「途上国から世界に通用するブランドを作る。」を掲げているマザーハウス。テレビ番組「情熱大陸」で紹介されていたので知っている人も多いと思う。マザーハウスはデザイナーの山口絵里子が大学時代にアジアの最貧国バングラデシュを訪れ、途上国の現実を知ったことから始まったそうた。善意や自己犠牲の上に成り立つ「援助や贈付」という形ではなく、経済基盤をしっかりと持った持続的な協力の仕方。それは途上国にある資源を使って、先進国でも充分適用する商品をつくり輸出を促進する、という考えにたどりついたとのこと。関西にはこのショップは少ないが、梅田のハービスエントでマザーハウスのバッグやスカーフに出会えた。シンプルなデザインで、素材の良さがよく表現されている。社会的意義がすばらしく、どこでどのようにして作られた商品なのかを販売員は熱意を持って説明してくれた。商品の成り立ちや作る人達に対して、マザーハウスの全員が「愛と誇りを持っているのがわかるし、ビジネスとしても成立させている。

低価格競争やネット通販の台頭などを経て、これからは心を軸にする考え方に重心を移すべきではないか、やはり大切なのは、思いや願いを込めた商品作りをすること。心に訴えかけていく商品作りをすること。真摯に作ることに向き合い、ものを通して思いをしっかりと伝えることが大切なのだと改めて思う。心ひかれるものには、その奥に込められた思いがあり、作り手と使い手が繋がっていると感じさせてくれるものがある。価格も大事情報も大事だが、振り回される事なく心の目で見えていきたいものだ。

写真：神沢郁子

021. ふとしたことから暖簾を調べ

ふとしたことから「暖簾」を調べ始めて5年以上が経つ。先輩の鈴木洋行氏に勧められて少しずつではあるが大阪・京都・奈良・伊勢・東京・真庭・川越などを取材し資料をあたっている。地域によってデザインに傾向があり当初は意匠に目を取られていた。やがてその空間や、まつわる歴史が見えてくると一枚の布が秘めている文化にも興味が湧く。今は何処に居ても目が暖簾を探している。

それにしても暖簾は不思議なものである。室町時代には氏族や商家の印や紋が描かれ、江戸中期にはかの有名な越後屋によって宣伝広告メディアとして飛躍した。信貴山縁起絵巻には絞り染めい半暖簾が見えるが、おそらく平安時代から形遣はほとんど変わらず今日に至る。減少していた暖簾だが都市部では飲食店増加に伴い少し増えているようだ。フレンチやイタリアンでも暖簾を掛ける店を見える。すこし変わったものもある。革製のもの、丸竹や割いた竹を、テニスボールほどの木の玉や丸太を連ねたもので有る。その発生や家主の思い入れなどはこれから調べるが楽しみである。

ところで、去年から今年にかけて沢山の白い布を見た。出会ったと言っても良い。数十年に一度の運宮に誘われ伊勢に行った。内容にもお宮にも約80cm巾の白い布がら枚襖に縫われて垂れ、風に揺れている。そしてまさに神様がお通りになる時、神様は白い布に囲われ(綿垣という)その先頭ではT字型の竿に垂れた白い布(行幕)が静々と進む。几帳とそっくりであり、暖簾の形の原型とも見える。スーパー能や狂言でもあちこちで白い布が静かに活躍していた。

昨年末に北京の日本学研究センターにおける日本文化の紹介の一環で「暖簾が語る布の力」と題して暖簾は平和の布であることを紹介した。諸先生方、多数の院生も大変に興味を持ち懇親会で話が弾んだ。その後センターに寄贈した麻に藍染めの暖簾も気に入ってくれたことは嬉しい。ただ事情があってこの暖簾も目線より高く掛けざるを得なかった。かるうして触れる事のできる高さになった。東京駅丸の内側の「KITTE」1階の和菓子屋にいたっては床から3メートルを超える上にある。銀座の店も然りである。サインとしての効果はあるがこれでは暖簾の魅力が半減どころではないと私は思う。残念である。暖簾はやはり出入口、又は通路にあって目線をゆるやかに導り、腕や肩に触れることで境界が確かになる。

最近取材のたびに感じることもある。白地の暖簾は美しい。色は周囲の空間やしつらえに任せて暖簾はシンプルが良い。また、暖簾は人に正対することをある程度強いるところがある。布の質感や印・紋とともにその平面性が際立ち、一瞬その広い面を意識するが、布の隙間が暖簾をくぐることを促す。不思議な布である。平たい一枚の布が千年以上も暮らしの中に息づいている。暖簾は日本文化の担い手であり既に古くから日本人の記憶の遺伝子に根を張っていると言いたい。

写真：板東 正

022. Big Catch Flag 大漁旗

ロンドンのアミューズメント関連の企業から学生に「Big Catch Flag」(大漁旗)のデザイン依頼がありました。新しいイメージの大漁旗をヨーロッパ各地でのイベントに使い日本の文化を紹介するとの趣旨です。私の担当するビジュアルデザイン専攻の学生はシルクスクリーンプリントしか染色の経験がなく不安はありましたが、海外で作品発表できるよい機会だとお引き受けることにしました。



大漁旗は元来、廣い海の漁に出た船が浜でまつ家族や仲間たちに無事と大漁を知らせるために使われたものです。広い海と高い空のなかで遠くからでもよく見えるよう鮮やかな色彩と大胆な構図が特徴です。

その絵柄は人々の祈りや願いをこめて縁起の良い

鰻魚や鯛、七福神、日の出、至船などが大漁の文字

とともに用いられました。

別名を「ふらいき」(福来旗、富来旗)ともいい、江戸時代後期あたりからの風習である萬祝着(まいわいぎ)の絵柄を踏襲しているといわれています。(萬祝着とは大漁の祝いに網元から網子に配られた着物で、友禅技法による吉祥の柄を配した華やかなものです。

残念ながら現在では大漁旗は進水式や新年の漁の時くらいにしに使われないそうで日常的にはほとんどみられなくなりました。ただ縁起物としてお店の装飾やスポーツの応援、結婚式や還暦祝いなどに使われることは増えてきています。

日本は40もの都道府県が海に面しておりそれぞれに漁港があります。4回生と修士の計20人が一人2点ずつ制作することにし、担当の県の生産風土や漁港の特徴などについて調べることからスタートしました。日本の各地を紹介するための旗となるよう、さらに各自のオリジナリティも感じられる作品を目指しました。学生は大漁旗を見たことがなかったため、全国青年印染経営研究会の紹介で船旗の得意な黒川染工場を見学させていただくことになりました。大漁旗は基本的に注文生産のためすべて納品されてしまいます。染工場にも写真や下絵しか残っていませんが、染めの工程や技法は説明していただけとのこととで学生と見学にでかけました。工場は明石町からさらに海寄りの場所で、天気よかったといく4月でも海の霧りと明るい光に包まれていました。実物を見ることは無理だと思っていましたが、黒川さんは一度納品した旗を船主さんから借りてきてくださり工場内にたくさん旗が飾られ一同大感激しました。

学生の制作技法は設備や納期の問題で本来の簡書きや型染めはむずかしくインクジェット出力を予定していましたが、見学で本染めのダイナミックな表現をたくさん拝見し、その力強い魅力に圧倒されどのように制作すればよいか本当に悩みました。例えば、大漁旗にみられる白線は染料の混ざりを防ぐための技法ですが同時に強い色彩のハレーションをおさえる役割もあり、それが大きな特徴と魅力になっています。しかしインクジェット出力の場合に大漁旗らしさを求めて簡書き風の白線を使ってもそれは本自調のプラスチック製品と同じでフェイクな表現になってしまうのではないかと心配でした。